

English Garden 付録第1話

"To the Japanese brain an ideograph is a vivid picture."

Lafcadio Hearn

「日本人の頭の中では、漢字は鮮明な絵なのである」 ラフカディオ・ハーン

「号外」に引き続いてラフカディオ・ハーンのお話です。

表題の言葉は、日本の印象を書いた“Glimpses of Unfamiliar Japan”（和訳名『日本瞥見記』あるいは『日本の面影』）の「第1章 東洋の第1日目」のごく初めの部分です。

ハーンは日本の昔話を題材にした『雪女』や『耳なし芳一』などの『怪談』で有名ですが、旅行記やエッセイなどにも味わいの深い作品をたくさん残しています。

日本に来る以前から、すでにジャーナリストとしてニューヨークでもある程度名前を知られていましたが、書物で読んだ日本という国にすっかり魅せられ、この未知の国を訪れてその見聞記を書こうと思いついたのです。

1890年(明治23年)4月4日、ハーンは朝の6時に横浜に着きました。それからすぐ人力車を雇って1日中町を走ります。長いあいだ夢に見ていた日本の町は、何もかも新鮮で驚きに満ちていました。4月初めのひんやりした朝の空気は澄み切っていて日差しは暖かく、天気までも「言葉にならないほど魅力的」です。すっかり興奮して夢見心地のハーンには、日本の町は「まるで妖精の国」のようで、「人も物もみな小さくて、風変わりで、神秘的」に見えたのでした。しばらく町を走っているうちに、あちこちに翻る幟(のぼり)や濃紺の暖簾(のれん)に書かれた白や黒や青や金色など色とりどりの漢字やかな文字を意識するようになりました。それと同時に、不思議な光景や絵のような町並みの美しさは、漢字やかな文字のせいではないかと気づきます。それはまさに「天の啓示」のようなひらめきでした。そのあたりは次のように表現されています。「日本人の頭の中では、漢字は鮮明な絵なのである。生きていて、語りかけ、身振りて訴える。日本の通りの空間にはどこにも、このように目に呼びかける文字や、顔のように笑ったりしかめてみせたりする言葉があふれているのだ」ハーンは肉筆の漢字のえもいわれぬ美しさに見とれながら、これほど優美な文字が生まれるまでには、原始的な象形文字や表意文字(漢字)を何世紀にもわたって発展させてきた多くの書家のたいへんな努力があったのだらうと、その歴史に思いをはせていきます。こうしてハーンは人力車という「乗り心地のよい小さなクルマ」で、人が車を引くという労働に同情しながらも、いよいよ日本人の心に迫るために、一つ覚えの日本語「テラヘ ユケ」を連発してお寺めぐりを始めます。



何番目かに訪れた寺で、英語の達者な若い僧に出会いました。アキラ(真鍋晃)と名乗るその僧は、その後しばらくハーンに通訳をしながら仏教文化の解説や民話・伝説の紹介をするなど有能な助手となります。第2章の「弘法大師の書」には、アキラから聞いた弘法大師の書にまつわる不思議なエピソードがいろいろ語られています。

700ページに及ぶ“Glimpses of Unfamiliar Japan”には1890年4月4日の横浜上陸から翌年の11月15日に松江を去るまでの約1年半の出雲・松江を中心とした印象記や、神話、伝説、民話などが収められています。地蔵の由来や養の河原で石積みをする子どもの死霊の話、キツネの言い伝え、庭園にまつわる伝説、幽霊や化物の話など、今の日本人には珍しい話や、昭和の初めまでは一般の家庭でもよく行われていた祭事や習慣などが細かく記されています。しかも、それらは通り一遍の記録ではなく、そうした話のもとになる日本人のものの考え方にまで言及されており、ハーンの並々ならぬ洞察力をうかがい知ることができます。

以下、ハーンの経歴を簡単にご紹介しましょう。

ラフカディオ・ハーンは1850年、ギリシャの小島レフカダ島で生まれました。名前の「ラフカディオ」はこの島の名前をとったものといわれます。母のローザ・カシマチはこの島の近くの島に生まれ育ったギリシャ人、父のチャールズ・ハーンは当時イギリス軍の軍医としてこのあたりに駐留していたアイルランド人で、ラフカディオが生まれて間もなく西インド諸島に配属されました。母はラフカディオが2歳になると夫の実家を頼ってアイルランドのダブリンに行きました。

しかし、その後母子は次々と不幸に襲われます。ラフカディオが3歳のとき父のチャールズは西インド諸島から帰国しますが、アイルランドの風土になじめなかった母は精神を病んでいて、一人でギリシャへ帰ってしまいました。チャールズはローザと正式に離婚して初恋の女性と再婚したため、ラフカディオは、裕福で子どものいない大叔母に引き取られました。

13歳でフランスの神学校に短期間送られ、その後イギリスの寄宿制のカトリック神学校に4年間在学しましたが、厳格なカトリックの教えにはなじみませんでした。またこの間に、縄の結び目が目に当たって片目を失明する事故に見舞われます。17歳のとき大叔母が破産したため退学し、ロンドンで自活の道を探りながら試練の時を過ごしました。

19歳になった1869年、大叔母からの送金を受けてアメリカのシンシナティの知人を頼って渡米しました。困窮の中で修業を積んだハーンは、ジャーナリストとして認められるようになりました。そうするうち当時新進のジャーナリストで社交界の花形だったエリザベス・ピスランドと出会って強い友情で結ばれ、生涯にわたって親交を結びます。

36歳のとき新聞社をやめ、『ハーパース・マガジン』との契約で2年間西インド諸島のマルチニーク島で生活し、その見聞記を出版して好評を博しました。日本に来ることは、その続きの仕事として計画されたものでした。

こうして1890年4月、ハーンは挿絵画家ウェルドンと共に来日したのですが、ハーパー社との話がこじれて契約を破棄、島根県松江市の尋常中学校の英語教師の職をえて8月30日に松江入りをします。東京から姫路までは汽車がありますが、その先日本海側まで

は、4日かけて人力車で険しい山や谷を越える大旅行でした。

すでに英訳の古事記を読み「日本の宗教や習俗を知るため」に日本に来たというハーンは、明治維新前の日本の面影が残る出雲や松江の地がすっかり気に入りました。赴任した中学校の先生や生徒たちから暖かく迎えられ、島根県知事の厚遇も受けて、ハーンは松江に腰をすえ、英語教師を勤めながら取材を続けました。

最初の冬ハーンは寒さで体調を崩し、その折に身の回りの世話に来てくれた日本婦人の小泉セツと親しくなって結婚します。ようやく帰化が認められたのは1895年で、日本名を小泉八雲としました。セツ夫人は聡明で教養もあり、その土地に伝わるいろいろな話を調べて「自分の言葉にして」ハーンに語り聞かせたそうです。子室にも恵まれてハーンは初めて家庭の暖かさを味わい、妻の親族も含めて家族を大切にしました。(次回に続く)

(訳書はいくつか参照しましたが、本文の引用・抄訳部分は筆者自身の訳によります)

参考文献

- “Glimpses of Unfamiliar Japan,”
Lafcadio Hearn, Charles E. Tuttle Company, Tokyo, Japan, 1976
- “Out of the East Reveries and Studies in New Japan,”
Lafcadio Hearn, Charles E. Tuttle Company, Tokyo, Japan, 1972
- 『小泉八雲作品集 第五巻(日本警見記上)』
Lafcadio Hearn, Charles E. Tuttle Company, Tokyo, Japan, 1972
- 『小泉八雲作品集 第六巻(日本警見記下)』
Lafcadio Hearn, Charles E. Tuttle Company, Tokyo, Japan, 1972
- 『小泉八雲作品集 第七巻(東の国から・心)』
平井呈一訳、(株)恒文社、昭和39年
- 『新編日本の面影』
ラフカディオ・ハーン著、池田雅之訳、角川文庫、平成16年再版発行
- 『怪談・奇談』
小泉八雲著、平川祐弘編、講談社学術文庫、1990年
- 『雪女 夏の日の夢』
ラフカディオ・ハーン作、脇明子訳、岩波少年文庫、2003年
- 『思ひ出の記』
小泉節子著、(合)ヒヨコ舎、2003年
- 『ラフカディオ・ハーンの耳』
西成彦著、岩波同時代ライブラリー、1998年
- 『ラフカディオ・ハーンの耳』
西成彦著、岩波同時代ライブラリー、1998年
- 『神々の国 ラフカディオ・ハーンの生涯 日本編』
工藤美代子著、(株)集英社、2003年
- 『精霊の島 ラフカディオ・ハーンの生涯 ヨーロッパ編』
工藤美代子著、(株)集英社、1999年
- 『夢の途上 ラフカディオ・ハーンの生涯 アメリカ編』
工藤美代子著、(株)集英社、1997年
- 『ファンタスティック・ジャーニー ラフカディオ・ハーンの生涯と作品』
ポール・マレイ著、村井文夫訳、(株)恒文社、2000年

この文書の著作権は株式会社富士通アドバンスソリューションズが保有します。許可なく複製、転用、販売などの二次利用することは禁じます。雑誌書籍、広告など出版物への掲載にあたっては、お手数ですが、事前にご連絡願います。